

坂のまちの挑戦 ～長崎市におけるバリアフリー事例～

市街地が山の斜面に広がり、坂と階段の町として有名な長崎。斜面には車の通れる道が少なく、人がやっとすれ違えるほど細い道と階段が網の目のように広がっています。引越して馬が使われている(今でも?)ほどです。

長崎市も他都市同様に高齢化が急速に進んでおり、坂と階段という地形が問題をより深刻にしています。そこで、バリアフリー対策として数種類の整備を行い、効果を検証しながら良いものは今後増やしていくという試みが始まっています。その例を4つ紹介します。

< 1 . 階段に懸垂型の小型 Gondola を整備 >

階段をゆっくりと移動する、ぶら下がり型の小型 Gondola (2人乗り) が今年4月に登場。全長約60m。階段と直行する路地を遮らず、整備コストが比較的安い(約3千万円)ことがメリット。近隣の住民が配布された専用のカードで利用している。私が見た時も、買物の荷物を持った主婦や高齢者など複数の人が利用していた。地元でも好評だそうです。(日経アーキテクチャー2002年5月13日号にも載ってます。)



< 2 . 既成の斜面市街地に斜行エレベーターを整備 >

延長160m、高低差50m、17人乗りの斜行エレベーターが今年7月に供用した。全部で5箇所の乗降場がある。斜面に広がる既成市街地に、都市計画道路として位置づけて、街路事業で整備を実施。全国でも珍しい例(初めて?)である。約14億円。直行する既存の路地も歩道橋を張り出して復元している。更に上への延伸計画があるらしい。



< 3 . 階段に小型モノレールを整備 >

全長約26m、2人乗り。観光地として有名なグラバー園へのバリアフリー対策として昨年の年末頃設置。車いす専用で係員を呼び出す形で運用している。

< 4 . 共同化したコミュニティ住宅のエレベーターを一般開放 >

共同化して新築したコミュニティ住宅の最上階を屋外の路地に接続し、エレベーターを開放することで、この建物分の高低差を解消している。一部を一般開放するため、再開発などにおける一時的な受け皿住宅として活用している。

